第四話 の松山、 波越



軒 多賀城の八幡はこのあたりでも大きな集落で、上千軒、下千 つ て言わ れるくら し、 家が建っ T し、 ね 大きい町だったった

そ こに鏡が池って池があって、 そ のそ ばに茶屋あったんだって。

今 いう飲み屋 ね。

んだよ。

こへ八幡の若い衆だの、 みんな飲みにいっていたんだと。

出 したり の茶屋に、 て働いていたから、 こさじさん つ てきれ みんなその娘さん目当てだった し、 な娘さんがいてね、 お 酒

ころ が、 この茶屋さ、 頬 つ か 冷 た 猩 々 が来るんだと。

6

だと。

金も持たないで来るんだと。

ねえで、あまった酒飲ませたり、 だ けんども、 してたんだと。 こさじさんはやさ-ときには、 い娘だっ た 小遣いくれてやっ から、 悪 い顔を

そ れ見て、 お も」 しえ ねえ の は土地 の 若 い衆だった の

やきもち焼いて、

たり

つか、 あいつ、 殺さなく てねえ」

つ て、 相談したんだと。

それを聞いたこさじさんは、 猩_ひ々 に言っ たんだと。

「あんだ、ここさ来ては駄目だよ。殺され るから、来ては駄目だよ」

> 教えたんだと。 したら、そ 猩_ひ々 か、 たんだべ な、

あそこの末のすえの 「何月何日に、 松山さ逃げろよ。 こさ大きな津波来て、 きっとだよ」 みんな流される。 おま

んだと。 して、 ほ んとに、 そ の日になったら、 大きな津波 が

れたように末の松山さ逃げて助か みんなみんな、 どっ と流されたけど、 ったんだと。 こさじさ 6 は、 教え

八幡千軒のでやわた んだと。 町もみんな流れて、 今の利府のほう 流れて し、

った八幡のこ そんで、 利府 が そ は 八ゃれた こにまたできたんだ って町が いまでもあるんだって。 ね。 流れて

の話、 多賀城の末のすえの 思 出す 松 山は、 っとそこにあっ 津波が 来るたびに

詠まれている こさじさん が逃げて んだと。 助か つ の末れの 松

契りきな み つ つ

末え の 松 Ш 波越さ は

波越さじ て言う 0 は、 0

かね。